

一郎さん「中央公民館の跡地をどうするか、具体的には何も決まってるんちゃうことかいな？」

若林かずみ「ま、そういうことになりますね……。色々計画が…ということで…」

一郎さん「計画倒れにならんように、議会もしっかりと見張り番せんとアカンで！」

若林かずみ「承知いたしました！」



令和2年1月時点の中央公民館

一郎さん「そういえば、義務教育学校、いつできるねん」

若林かずみ「令和4年4月に北と南が同時に開校予定です。」

一郎さん「ふーん。それにしても、えらい金かかるらしいな。畠田駅前も王寺駅前もちゃんとするんやろ？そんな金、あるんかいな？」

若林かずみ「大丈夫ですよ！と断言できるほどに余裕のある財政状況ではないですね。というわけで、令和元年12月定例会の一般質問で『王寺町の中長期財政計画について』質問させていただきました。新しい中長期財政計画は、令和2年3月議会で令和2年度の当初予算が計上されたときにありますが、ひとまず、昨年度の時点での情報を基に、理事者にご説明いただきました。財政の話は深いですので、ひとまず、少しだけ、簡単に説明しますね」

一郎さん「簡単に頼むで〜。小難しいのは、聞いても何にも分からんからな！」

王寺町のお財布事情どうなん？

平成30年度決算によれば、王寺町の経常収支比率は96.1%です。

経常収支比率というのは、簡単に言うと、「自由に使えるお金がどれだけあるか」が分かるものです。

経常収支比率が96.1%というのは、財布の中に1000円が入っていたとしたら、961円は行き先が決まっていて、自由に使えるのは、その残りの39円ということになります。(^^)

ざっくりとイメージしていただくと…平成30年度の王寺町の一般会計決算額では、歳入が96億6735万9千円
これの96.1%は約92億9033万2千円とすれば、残りは、約3億7702万7千円。これが王寺町の自由に使えるお金ということになります。

※経常収支比率とは、「地方公共団体の財政構造の弾力性を判断するための指標。人件費、社会保障関連の扶助費、そして、借入金の返済に当たる公債費等の経常的経費に充当された一般財源の合計額が、地方税や普通交付税を中心とする経常的な一般財源の合計額に占める割合を表す。この比率の数値が高いほど財政構造の硬直化が進んでいることになるという指標」

一郎さん「ちょっと待て！学校建設だけでも、何十億とかかるやろ！」

若林かずみ「約4億しか使えないというわけではありません。これは、あくまでも経常収支比率の見方。事業を進めるにあたっては、有利な補助金を利用したり、基金と言って、蓄えを取り崩したり…」

一郎さん「でも、蓄え使ってしまつたら、災害とか起こつたらどうすんねん。やっぱり蓄えは置いとかな〜」

若林かずみ「ですね。令和2年度以降、王寺町の実質収支額は赤字に転じることとなりますので、今後の財政状況についてもしっかりとチェックしていきます！」

一郎さん「頼むで〜」

若林かずみ「承知いたしました！財政のお話は、

今後もおいおいお話ししますね」

一郎さん「せやな。ちょっとずつでええ。頭に入らんわ(笑)」

若林かずみ「ですよ(笑)。で、12月定例会の一般質問ですが、中長期財政計画の話はあくまでもネタフリ。本丸は『各種イベント事業の見直し』なんです」

一郎さん「なんや、なんか止めたいんか？」

若林かずみ「そういうわけでもないんですけど、

★★令和元年12月定例会での一般質問は「王寺町の中長期財政計画について」&「各種イベント事業の見直しについて」★★

問い①ミルキーウェイ事業と盆踊り事業については、合わせて約2,000万円もの多額の費用がかかっていますが、今後の財政状況を考えたときに、見直しに必要があるのではないか。

回答①ミルキーウェイや盆踊りについては、一大イベントとして定着しており、内容の工夫や民間事業者の協賛などに取り組むが、今すぐ規模の縮小はしない。

☆かずみコメント☆
出店者は必ずしも王寺町民ではないのですから、出店料を上げるなり、収益を上げることに目を向けていただきたいですね。



お財布の紐をメるとなったら、やっぱり娯楽からでしょ？無駄なものはないかな？合同でやった方がないかな？とか…ね。そういうことを一度、立ち止まって考えてみてもいいんじゃないのかな？と思ったんです」

一郎さん「ふ〜ん。」

若林かずみ「私の質問と理事者の回答は、以下のような内容になります」



←ミルキーウェイ 達磨寺燈花会

→ミルキーウェイのり星放流



問い②現行の町民体育大会は、全自治会のうち半数以下の参加となっているが、令和二年から体育の日がスポーツの日に変更されるのに合わせて、時代に合った新しいスポーツイベントに変わっていくべきではないか。

回答②種目自体の見直し、個人での参加、合同チームでの参加、アクセスの利便性向上など、色々工夫しながら、地域のきずなづくりの場として、今後も開催を続ける。